

## 住居領域に対する学生の意識に関する一考察 — (1) 2011年の傾向—

宮 川 博 恵

A Study Students' Awareness About the Housing Field (1):  
Trend in 2011

Hiroe MIYAKAWA

### 要 旨

住居領域に対する学生の意識を把握するために、アンケート調査を実施した。インテリアを必ず含むと定義すれば90%程度の学生が住居領域を好意的に受け入れていることがわかった。高校家庭科の領域に関しては、衣食住の3領域に95%近くの学生の関心が集中する傾向がみられ、なかでも、食生活は80%を上回った。高校では住生活の学習時間が少なく、学生たちは大学入学後に住居領域を学ぶと考えてよい。インテリアのイメージを回答させると、雑貨と答える学生が多く、住居系科目の実態とは隔たりが大きいことが明らかになった。本学科の住居系科目については、カタカナ表記されているものをインテリアらしい科目と回答する傾向がみられた。

キーワード：住居領域、意識、インテリア、建築、イメージ

### 1. は じ め に

近年ではごく一般の書籍<sup>1</sup>の中にも「北欧スタイル<sup>2</sup>」や「ナチュラルテイスト」などの用語が使用されることも珍しくない。とくにインテリアという言葉は、様々な種類の洒落た空間映像とともに目にする事が多く、居室の設えに関する選択肢も、その需要を満足させるべく実に多岐にわたっているほか、最近ではジェネリック（復刻版）家具<sup>3</sup>やリプロダクト家具が安価で販売されており、デザインセンスの良いものを手にすることが容易になってきている。また、賃貸住宅などにおいても、内装材を工夫すること<sup>4</sup>で入居率が上がるという。住空間の質をいかに高めるか、人々の住空間内部への関心の高さを多方面から窺い知ることができる。その一方で、住空間

1 カタログ系雑誌ばかりでなく、一般的な雑誌でもインテリア用語を使用するケースがみられる。

2 北欧では手工業による木家具や木本来のナチュラルな色合いを生かした家具が多く、素朴な造りの中に暖かさを感じさせ人気がある。家具ばかりではなく、生活雑貨やテキスタイルなど、生活空間に見られるいろいろなものに北欧製品が浸透している。

3 デザインライセンスの期限が切れ、本物に比べ安価に購入できる家具類のこと。リプロダクト家具も同じ意味で使用されている。

4 画一的な、例えば同じ色・素材の内装材を施した空間より、部分的に異素材・異色の内装材を施す方がセンスを感じられるのだという。

の設計などに関しては、専門書でなければ目にする機会はないに等しく、住居を取り巻く様々な要素のうち、ごく限られた要素のみが脚光を浴びる状態である。

このような環境の中で、学生たちは住居領域をどのように捉えているのだろうか。家政系学部位置づけられる本学科は、衣・食・住・健康・環境の5領域に関して、各自で自由な科目選択のことが特徴である。学生たちは5領域のうちから主たる領域を定め、その領域の科目を履修の中心としながら、その他4領域の科目も受講していくスタイルをとるのが一般的である。そのため、住居系科目の履修者には住を学びの中心とする学生としない学生が混在しているのが実情で、各層がどれくらいの比率かは科目により異なっているものと思われる。住居系科目にはその名称からして理系を容易に推測させるものも多く、住居領域、とりわけ建築領域にアレルギーを示す学生は、住居系科目を必要以上に理系であると捉えて敬遠している可能性も否定できない。確かに、設計製図一つにしても数字や数学の感覚が求められる。構造力学などでは物理的感覚も求められるが、それらを考慮したとしても住居領域に対する学生の反応は様々で、その現象を生む背景を明らかにすることは授業展開をより良いものにしていくために重要である。また、学生と日々接する中で、最近の学生は高校での家庭科学習時間が少なく、とりわけ住生活に関してはほとんど学習していない、もしくは学習していないのではないかという印象を受けることも多く、学生の住居領域に対する「基礎知識量」を把握する必要性が極めて高いと感じる。さらに、住居領域に対する学生の興味関心の程度・高校家庭科における住生活領域の学習量と内容、これらがどのように関連しているのかを整理し、学生の意識を把握することは、学生と教員側の認識のズレを低減させることにもつながる。本研究はこのような背景から、学生の住居領域に対する意識、高校家庭科における住生活領域の学習状況などについて明らかにしたいと考える。

## 2. 研究の方法

2011年6～7月にかけて、生活デザイン学科の学生を対象にアンケート調査を行った。高校時の記憶がなるべく鮮明であること、住居系科目をおおむね学習し終えた段階であることから、1・2年生並びに4年生にアンケートを実施した。有効回答数は174である。なお、回答者の内訳は1年生64人・2年生61人・4年生49人である。質問項目は、現在中心的に学んでいる分野(衣・食・住・健康・環境の分野選択)、高校での文系・理系等の区分、得手：不得手科目・高校家庭科の住生活領域の学習内容とおおよその学習時間、住居系領域・科目に対する意識などである。また、インテリアのイメージについてSD法印象評価実験を行いTab.1に示す20形容詞対から5段階で評価させた。

Tab.1 印象評価に使用した20形容詞対

明るい-暗い	上品な-下品な	可愛い-かっこいい	女性的な-男性的な
優しい-こわい	自由な-不自由な	重い-軽い	現代的な-古典的な
ナチュラルな-人工的な	ゴージャスな-シンプルな	好きな-嫌いな	発展的な-伝統的な
温もりがある-冷めた	都会的な-田舎的な	強い-弱い	賑やかな-静かな
派手な-地味な	洋風な-和風な	開放的な-閉鎖的な	鋭い-鈍い

## 3. 住領域への興味関心の程度と学生の気質

## (1) 文・理比率と住領域への意識

本学科で現在中心的に学んでいる分野（衣・食・住・健康・環境）、高校時代の文系・理系等の選択別に、インテリアと建築に対する興味の度合いについて集計した結果をTab.2に示す。縦軸はインテリア・建築への興味関心の程度（インテリアのみに興味がある・建築のみに興味がある・インテリアと建築共に興味がある・どちらにも興味がない）の区分を示しているが、アンケート調査の際にはインテリアと建築の語句に対して特に説明は行わなかった。また、横軸には現在中心的に学んでいる領域別に高校時代の所属（文系・理系・その他）を示した。Tab.2中に網かけした部分は、現在は住を中心に学び、高校では文系出身で、インテリア・建築共に興味があることを意味する。

Tab.2 興味のある分野：数値は人数、（）内%はn=174に対する比率

本学で中心的に学んでいる分野	衣			食			住			健康・環境		計
	34(19.5%)			59(33.9%)			74(42.5%)			7(4%)		174
高校の出身領域	文系	理系	その他	文系	理系	その他	文系	理系	その他	文系	理系	
インテリアのみ	16	3	2	25	1		14	2		2	2	65(37.4%)
建築のみ									1			1(0.5%)
インテリア・建築	9			12	5	2	40	15	2	1	1	90(51.7%)
どちらも興味なし	1		3	11	3					1		18(10.3%)
計	26	3	5	48	9	2	54	17	3	4	3	174

現在中心としている学習領域の内訳をみると、住・食・衣の順で多く、この3領域で全体の96%を占めることがわかる。次に高校時代の文理区分も合わせてみると、健康・環境では文系・理系出身者はほぼ同数であるが、衣では文系が多く26人（衣系学生の76.5%）、次にその他、理系と続く。食もその81%強の48人が文系で圧倒的に文系が多いが、残る割合のうち15%程度（9人）は理系出身者である。住ではその73%程度（54人）が文系出身であり、衣や食と同じく文系比率が高いものの、理系出身は23%程度（17人）と理系の多いことがわかる。食と住にもその他出身者が含まれるが3%程度と少なく、衣では5人と衣の15%程を占める結果となった。なお、高校の文理区分の比率は、文系132人（75.9%）、理系32人（18.4%）、その他13人（7.5%）である。

インテリアと建築に対する興味の程度に関する回答で、該当者が最も多かったのはインテリア・建築ともに興味がある、の90人でこれは全対象者の約52%にあたる。次に多かったのは、インテリアのみに興味のある、の65人であった。この2つの区分で155人となり、全体の89%程度を占めることから、インテリアを必ず含むと定義すれば、本学科の学生はおおむね住居領域に関心があるといえる。

インテリア・建築ともに興味がある、の回答者の内訳をみると、住の学生が57人と突出して多くこの質問項目の63.3%を占める。次いで食19人、衣9人の順であった。インテリアのみに興味があると回答した学生が多いのは、食・衣・住の順で、食と衣ではこの項目に回答した学生が最も多いのに対し、住ではインテリア・建築に興味がある、に次いで2番目に回答者が多いことがわかる。これらのことから、住を学びの中心とするかどうかは、建築への興味の有無が影響しているものと推論できる。また、インテリア・建築どちらにも興味がないと答えた学生は住系を除く領域に分布し、なかでも食の学生が14人と食系学生の24%、この区分の77.8%を占め特に多い。

衣でも4人がこの区分に該当するが、これは衣系学生の12%にあたる。食は文系・理系・その他の構成比率が住と似通っていて、住に次いで理系出身者が多かったものの、住の学生とは気質が異なるグループが存在すると解釈できる。建築のみに興味のある学生は極端に少なく、わずか1名(0.5%)であったことから、学生たちにはインテリア領域が必須であるといえる。

## (2) 高校家庭科領域への興味

本学科は家政系であることから、高校時代には家庭科領域への関心がある程度高かったことが想定される。家庭科にも衣食住の領域があるため、高校時代の学習経験から本学での主な学習領域を決めているのではないかという仮説に基づき、高校家庭科の領域(食生活・保育・住生活・高齢者・衣生活・人生をみつめる・資源をいかす、の7領域)に関して、どの領域に最も関心があったかを回答させた(n=174)。その結果、137人(79%)という圧倒的な割合で食生活の分野と回答しており、他領域は、衣生活19人(11%)・住生活10人(6%)、人生を見つめる：保育が共に3人(2%)で、高齢者に至っては0%であった。衣・食・住生活の3領域の合算値は95%程度と極めて高いが、これは現在大学で衣食住を中心的に学んでいる学生の割合とほぼ等しい。高校家庭科は7領域から構成されていたが、ここでも衣食住の3領域に興味関心が集中していて、学生たちの興味関心の中心は高校時代・大学時代ともに、その構成比率が異なるものの一定して衣食住のいずれかであることが確認できた。

高校時代に住生活領域を学習したことがあるかの問いに関して、学んだと回答した学生は、68人(39%)と4割未満であった。この4割について学習時間をみると最長でも4時間程度であった。自由記述から、間取りを考え図面を書く・簡単な家の模型作り・高齢者住宅のバリアフリーについて考える、などの内容を学んでいたようである。この質問項目では、学習したという記憶がない、もしくはわからないという曖昧な回答が目立って多く41人(24%)、学習していないは65人(37%)であった。家庭科住生活に対する意見を自由記述させた箇所では、家庭科の授業時間に占める住生活領域の授業時間が極端に少なかった、という意見が多く得られた。この他、高校1年次にしか家庭科を学習していない、の回答も多くみられたことから、家庭科における住生活領域の学習時間の短さが、学習したかどうかの記憶を曖昧にさせているものと思われる。

高校家庭科の授業を取り巻く環境も年々変化してきている。速水ら<sup>5</sup>も述べているように、『家庭科の教員は食物・被服系の教員が多く、学部卒業者でみれば住居系学科の出身者は全体の数%程度にすぎない。大学院を合わせても専門分野が住居である教員は極めて少ない』状況は近年でもあまり大きく変化はないものと推察される<sup>6</sup>。住居を専門とする教員が極めて少ない状況に加えて、家庭科が男女共修科目になったことや、授業時間の減少などから取り扱うことのできる範囲が狭まる上に、どの内容を扱うかは担当教員の裁量に任されていることが多く、住居の授業時間がほとんどないケースも生じているものと思われる。近年の高校家庭科は、ほぼ食の授業に特化しており、とりわけ調理実習に重きが置かれているようである。高校における家庭科学習状況が大きく様変わりしているなかで、その延長上にある大学の教育内容がどうあるべきか、検討すべき段階に来ているのではないだろうか。

## (3) 得手・不得手科目

次にインテリア・建築への興味があると答えた学生(155人)について、インテリアのみに興

5 文献(1)より。

6 2011年に教員免許講習(家庭科：住居領域)を担当する機会があったが、専門が住居の参加者は0名であった。

味のある学生（65人）とインテリア・建築共に興味のある学生（90人）別に高校時代の得意・苦手科目について回答させた結果をFig.1・2に示す。どちらの科目も、生物・国語・英語・数学の回答が多いのが特徴であるが、苦手科目には88人、得意科目には118人の回答した上位4科目である。

インテリアのみに興味のある学生の苦手科目の内訳をみると、17人（インテリアのみに興味のある学生の26.2%）が国語と回答しており、数学・生物・英語と続く。苦手科目の上位4科目で計40人であったことからインテリアのみに興味のある学生の約6割に関してFig.1より説明される。一方、得意科目では数学29人（インテリアのみに興味のある学生の44.6%）、英語・国語・生物の順である。得意科目の上位4科目で計49人は、このグループの75.4%にあたる。

インテリア・建築共に興味のある学生のうち22人が数学を苦手と回答し、これはインテリア建築共に興味のある学生の22.4%を占める。次に国語・生物・英語の順で、これら4科目の合計人数は49人（インテリア・建築共に興味のある学生の54.4%）であった。得意科目をみると、数学36人（インテリア建築共に興味のある学生の40%）、英語・国語・生物の順に回答されている。これら4科目で73人、インテリア建築に興味のある学生の81.1%が説明される。インテリアのみに興味を示す学生は数学が苦手、建築にも興味を示す学生は数学が得意と想定していたが、結果としては、インテリアに興味のある方が数学に得意意識を持つ学生が多い結果となった。インテリア・建築共に興味のある学生は数学に得手不得手の学生が混在するのが特徴で、不得手と回答した学生はインテリアのみに興味のある学生よりもかなり多い点の特徴である。

インテリアのみに興味を示す学生は、理数系科目に強い苦手意識があるのではないかと考えていたが、建築にも興味のある学生との間にはあまり差がないことがわかる。

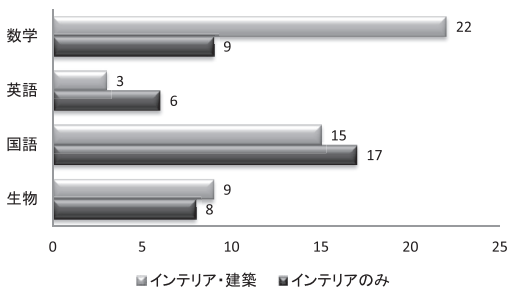


Fig.1 高校時代の苦手科目（人）

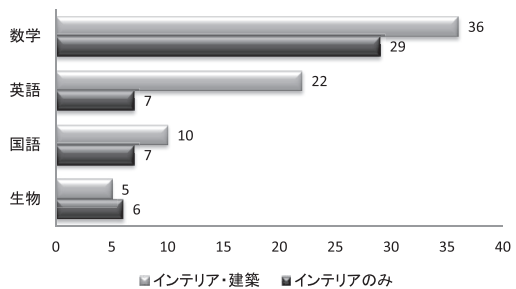


Fig.2 高校時代の得意科目（人）

学生たちは高校家庭科でもある程度住居を学習し、その学習の延長線上に本学科の住領域を位置付け、さらには興味を示していると考えていたが、この調査によりほとんどの学生が大学入学後に住領域を学ぶ状況にあることが明らかになった。一方で、本学科の住系科目は、二級建築士資格にも対応<sup>7</sup>しているほど充実している。建築士試験ともなれば、構造力学のような数学力・物理力を必要とする理系科目を乗り越えなければならない。住領域を中心とする学生がみな建築士受験を希望するわけではなく、むしろそれは少数派である。しかし、建築士とまではいかなくとも住領域に興味のある学生達が、インテリアのみ、のグループを形成していることは明らかで

7 2011年時点では二級建築士対応、2014年現在は一級建築士に対応している。



その数がかなり多いことが確認できた。

高校では食生活の内容に最も興味があったと回答した139人のうち、現在食を中心に学んでいる学生59人を差し引いた残り80人は、本学では食以外の領域を中心に学んでいるということになるが、高校時と現在の嗜好の変化（以降の%は $n=174$ に対する割合）をみると、食は80%から34%に46%減、住は6%から43%に37%増、衣は11%から20%に9%の増となるため、その分散先は衣・住と見るができる。とくに食の大幅減はほとんど住に移行しているとみられる。また、高校の衣生活や住生活を最も好きであったと回答した学生は、現在大学でもその分野を中心に学んでいることが多いこともわかっており、本学科の住系学生にはもともと住生活が好きだったグループと高校では食生活に興味のあった学生とが混在しており、とくに後者の比率が高いことも明らかになった。

#### 4. 住居領域とイメージ

学生たちは住居領域にどのようなイメージを持っているのだろうか。インテリア・建築という言葉のイメージと住居授業科目名の2つの側面について明らかにしたいと思う。

##### (1) インテリア・建築のイメージ

Fig.3・4にインテリア・建築と聞いてイメージするものを自由記述させた結果を示した。自由記述であるので、複数回答があった場合もすべて集計している。インテリアのイメージに対しては199、建築のイメージには140の回答が得られた。

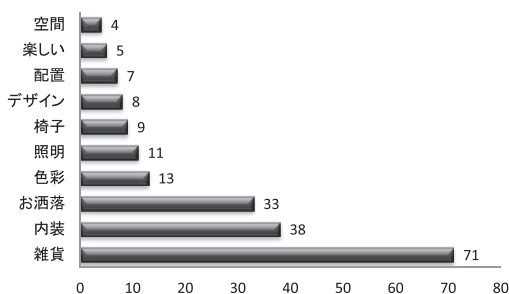


Fig.3 インテリアに対するイメージ (人)

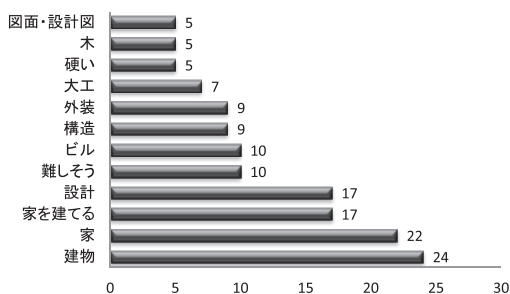


Fig.4 建築に対するイメージ (人)

インテリアでは雑貨のイメージが突出して多く71人、次いで内装、お洒落の順である。インテリアとは、本来住空間内部を構成する様々なものであるが、学生たちは自分たちにより身近な雑貨類をインテリアであると認識している割合が高く、実際の住居講義科目・内容とは隔たりを感じさせる回答となっている。4位の色彩は、色彩学が、2位の内装と5～7位の照明・椅子・デザインはインテリアデザイン論、基礎デザインなどが対応していると考えられるが、今回アンケートに使用した住居系科目（専門科目のみ）総数21のうち、2割にも満たない科目の内容をイメージしているものと推察できる。このほか、お洒落や楽しいなど感性（好印象）に絡むイメージも多く回答されている。

建築をみると、建物を建てる・家・家を建てる・設計するというイメージが多く持たれており、これに関してはおおむね実態を理解していると思われる回答が目立つが、感性に関連する回答と

して、硬い・難しそうがあげられており、インテリアに対するイメージとは隔たりが大きい。

次に、学生たちは建築を理系、インテリアを文系と回答すると想定し、インテリアは文系か理系かを回答させた結果 (N=155)、理系と思う学生 (107人) が文系と思う学生 (48人) の2倍強となった (Fig.5)。とくにインテリア・建築共に興味があると回答した学生は、インテリアのみに興味があると回答した学生と比較し、より理系であると感じていることがわかる。インテリアは文系であると考える学生は、全体の3割ほどで、インテリアや建築への興味の度合いに関わらず、ほぼ同数となった。

次に、インテリアのイメージについてTab.1に示した20形容詞対よりSD法印象評価実験を行った。得られた結果について因子分析 (主因子法, バリマックス回転) を行い、因子負荷量が1以上の因子について0.4以上を示す15項目を選出した結果, Tab.3に示す4因子が得られた。因子1から4に該当した形容詞対から、インテリアは都会的で女性的かつ華やかなものとして、好意的なイメージで捉えられていることがわかる。

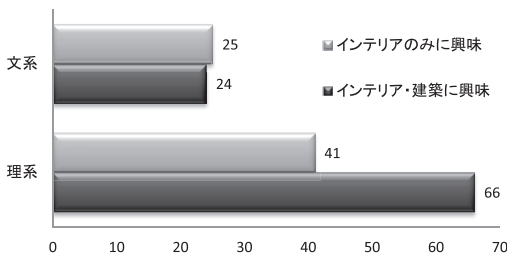


Fig.5 インテリアは文系か理系か

Tab.3 インテリアに対するイメージ評価

		因子1	因子2	因子3	因子4
都会的な	田舎な	.756	.063	.192	.021
現代的な	古典的な	.695	.064	.097	.206
発展的な	伝統的な	.551	.245	.110	-.058
洋風な	和風な	.517	.056	.035	.218
優しい	こわい	-.031	.744	.067	.124
好きな	嫌いな	.009	.625	.073	-.043
開放的な	閉鎖的な	.199	.524	.198	.170
温もりのある	冷めた	.184	.481	.080	.213
自由な	不自由な	.122	.434	-.113	-.047
派手な	地味な	-.003	.144	.777	.194
鋭い	鈍い	.102	-.047	.549	-.233
賑やかな	静かな	.170	.113	.476	.279
強い	弱い	.126	.021	.435	-.107
可愛い	カッコいい	.080	.014	-.103	.836
女性的な	男性的な	.225	.174	.041	.616

## (2) 住居系科目とイメージ

住居系科目は、学生たちにどのようなイメージで捉えられているのだろうか。現在食を中心に学びインテリアと建築に興味がないと回答した14人とその他出身者2人を除く45人 (以後、食系学生)、また住を中心に学ぶ学生74人 (以後、住系学生) の2グループを抽出し、本学科の住居系科目について、インテリア・建築のどちらと考えるかを5段階 (建築と思う・インテリアと思う・インテリアと建築の両方と思うが建築色がより強い・インテリアと建築の両方と思うがインテリア色がより強い・どちらでもない) で回答させた結果をFig.6・7に示す。食系学生が建築の科目と感じる科目は、建築法規・建築計画学・建築史・構造力学概論・住環境学・建築施工積算・住居材料学と続く。一方住系学生は、建築法規・建築計画学までは同じで、その後、建築施工積算・構造力学概論・建築史・設計製図・住居材料学と続く。

次にインテリアと感じる科目についてみると、食系学生、住系学生ともに、インテリアデザイン論・エクステリアデザイン・色彩学・デザイン基礎等の科目名があげられていることがわかる。エクステリアデザインなどは、講義内容から建築系科目であるのに、インテリア系の科目であると強く認識されている。列举された科目はカタカナ表記であることが特徴で (色彩学は除く)、食系学生はこの傾向を住系学生よりやや強く感じていることがわかる。同じ事柄でも、カタカナ表記にすると印象が異なって感じられることがあるが、インテリアという言葉そのものについて

も、Tab.3に示されたようなプラス評価の語句イメージが先行しているのではないだろうか。

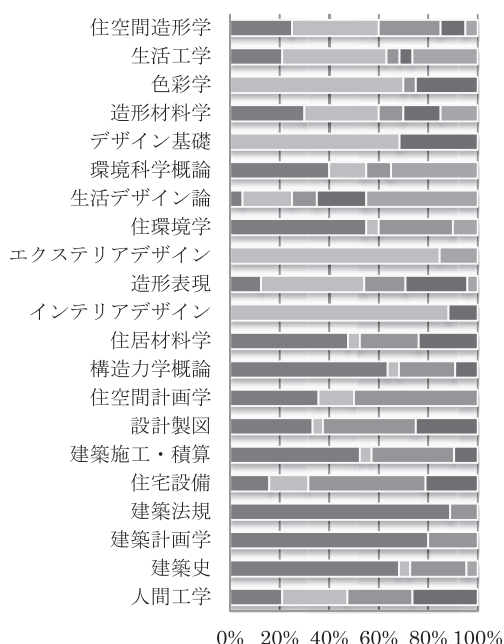


Fig.6 食系学生の傾向

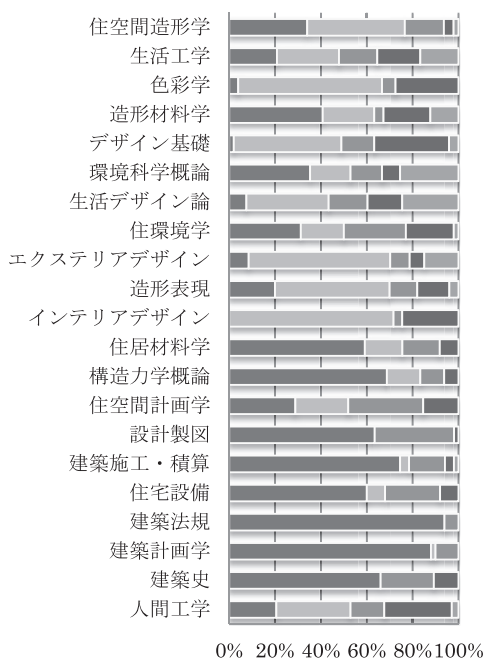


Fig.7 住系学生の傾向

※Fig.6・7の凡例 どちらも左より、建築と思う・インテリアと思う・インテリアと建築の両方と思うが建築色がより強い・インテリアと建築の両方と思うがインテリア色がより強い・どちらもでない

この研究は、学生の住居領域に関する意識について2011年度の状況をまとめたものである。高校家庭科で住生活の学習時間が極めて少ない状況にあるにもかかわらず、本学では住を中心として学ぶ学生が多いことが確認できた。大学ではその領域に付随する資格取得がその領域の学習目的となっている可能性も否定できない。今後定期的に同様の調査を行い、学生たちのインテリアや建築に関する意識を継続的に把握していく必要がある。

#### 引用・参考文献

- (1) 速水多佳子・関川千尋, 「学校教育における住居領域の教育システムの有効性について」, 日本家政学会誌, Vol.51, No.4, 2000, 317-330
- (2) 宮崎陽子・岸本幸臣, 「大学生による高等学校家庭科における住居学習の評価と課題」, 日本家政学会誌, Vol.59, No.4, 2008, 245-253
- (3) 宮崎陽子・多治見左近, 「家庭科住居領域における学習内容の構造に関する試行的研究」, 日本建築学会計画系論文集, 第77巻, 第674号, 2012, 873-880

[2014. 9. 25 受理]